

第25期日本学術会議若手アカデミー・イノベーションに向けた社会連携分科会
第2回議事録【議事要旨】

開催日時：2021年4月16日（金） 15:00～16:00

場所：ビデオ会議

出席者：高瀬、遠藤、上村、小森、藤岡、藤野、岩村、木村、田中、松中、南澤、山川（書記）

欠席者：なし（敬称略、名簿順）

【資料】画面共有資料

【議事】

1. 運営分科会で話し合われた内容の情報共有について（提言・25期の活動の方向性）

今回は年末の開催を予定し、今年度の分科会は次回で最後になる。「若手アカデミー情報発信分科会」の立ち上げの報告があり、この分科会を活用した広報活性化の依頼があった。また、若手アカデミー団体の特性として、専門家が多く若い世代が多いユニークな団体であるため、対外的交渉を行う際に活用することの提案があった。

2. 「イノベーション」の概念整理について

以下①②③の視点に沿って意見交換を行った。「若手アカデミー」として、あるいは当「イノベーション分科会」としてとなるかは検討中成も、今後3年間で提言を作成することとする。

- ①イノベーションとはどのような事象か？ 何が起きればイノベーションが起きたと言えるのか？
- ②現時点で優先すべきイノベーションの標的は何か？
- ③イノベーションを起こすために必要なもの、現時点でイノベーションを阻むものは何か？

本会における意見は以下のとおりであった。

①イノベーションとは、

- ・新しい軸、切り口、アイデアから社会的に変化をもたらすもの。
- ・新たな価値を生み出すもの。
- ・それまで価値を感じていなかったものに新たな付加価値をもたらすもの。
- ・「技術革新」と言われてきたものは、これから必要なイノベーションではないのではないか。
- ・クローズドイノベーションではなくオープンイノベーションが必要。
- ・「技術革新」に限らず、新しい販路の開発や「会社組織の効率化」なども対象にした広い概念であり、それまでになかった多くの需要を生み出すイノベーションのことを指す。
- ・イノベーションは計画的に起こそうとするものでも、上から政策的に行うものでもない。多様性が必要な役割を担う。
- ・人の行動変容が起こるもの、社会の在り方を変えるもの。

②現時点で優先すべきイノベーションの標的 については、「教育、人材(育成)」「環境」「人権」「思想、考え方、自己意識、社会意識」「ウェルビーイング」 等様々な意見があがったが、特に「教育」

の重要性が示唆された。

③イノベーションを起こすために必要なもの、イノベーションを阻むものは何か という視点については、「イノベーションを起こすために必要なもの」として以下のような意見があがった。

- ・新しい価値を創造する教育。
- ・イノベーションを起こす技術は「ニッチ」から始まる。
- ・技術を作る側としては、選択肢をいくつか用意しておく必要がある。
- ・若手研究者がオープンイノベーションを起こすものであり、大学をその方向に持っていく。

社会(企業)と連携してイノベーションを起こすことについて、周囲の許容が必要。

- ・イノベーションにおいては価値観(ライフスタイル)の変革も大事である。
- ・イノベーション自体が目的ではなく、それが起こりやすい状況を作ることが大事。
- ・多様性と「正しく話を聞ける、許容できる」といった「教育」がイノベーションの素地を作る。

また「イノベーションを阻むもの」としては以下のような意見があがった。

- ・次世代のイノベーションを促すもの、新しい付加価値をもたらすもの、という定義であるにもかかわらず、古い付加価値で教育することへの疑義。
- ・若い人の求める「安定」(安定した人生)や、チャレンジしたり、リスクを負ったりする人が少ない現状、内向き・周りに合わせている人が多い、といった要因がイノベーションを阻む。

その他

- ・「提言」については、分かりやすく、国民にイメージできるもので、シンプルなものが良い。(小さな変化、小さなイノベーションでも変化は起こせるという意識改革が必要)
- ・新しい芽を積極的に探知して保護して発信することも学術会議として重要なのでは。
- ・科学者は、フォーキャスティング的研究や、フォーキャスティングに基づく技術革新は得意であるし多くあるが、新たな価値を創造するといったバックキャスティングに基づく研究があまりない。
- ・イノベーションに関する理解を深めるために、イノベーション研究やバックキャスティング研究をしている科学者の話を聞かせていただくことが良いのでは。
- ・一方で、バックキャストといっても自分たちの価値観で行ったとしてもせいぜい20—30年の話であり、30年より長いと価値観の世代交代が起こる。それだからこそ「教育」が重要で、次の価値観の人に任せること必要、バックキャストにおけるジェネレーションギャップへの課題意識。

3. 今後の具体的活動について(議論の方向性、スケジュール、イベント開催 等)

1年目提言、2年目にイベント開催による社会との対話、3年目提言まとめ。といったプロセスがイノベーションなのかといった疑義や、イノベーションを研究する人はイノベーションに身を置いているのか、といった疑義もあり、この分科会が何をするのかを考え、時代遅れのイノベーション提言は避けたい。議論だけにしないよう進め方についても草案を出す。また、イノベーション研究学会との共創も必要と考える。

次回、年度内に1回程度実施予定、その他適宜非公開で実施。

以上